

〔図書紹介〕

鈴木文治(人間福祉部教授)著

『インクルーシブ神学への道:開かれた教会のために』

すが や まさ み
菅 谷 正 美

一人の人生を考えるのに、よく航海をたとえにすることがある。「インクルーシブ神学への道」の著作者である鈴木先生の航海は、あたかも船が社会の変化や自然の風を受けて地球の隅々まで荷主の要望、船主の判断に従い、東西南北へと奔走されているかのように様々な影響を受けて今日の大学と教会と言う港に停泊されている。しかし、鈴木先生の「インクルーシブ神学への道」を読み終えて、この本の中には、先生が歩まれた航海の跡を残されているだけではなく、今後も続く未知の世界への船出の勢いが示されていると悟った。

先生は、昭和42年、中央大学で法律を学び「法学士」の資格を取りながら、法律の道には進まず、読書の毎日であった。当時は、学生運動の最盛期であり、学園封鎖の波が大小ありながら日本の各大学を襲っていた。昔を回想するくだりでは、団塊の世代の人々に相通ずるものがあり、同じ時代の仲間という意識から先生の文脈に引きずり込まれるのである。時代を表現するに長けた先生の文章構成力に驚かされるとともに、19歳からの哲学書を読破され著作をされた経験が今日まで、継続されていることに驚きを禁じえない。読み進めるうちに同じ世代であるからこそ感じるところが随所にある。同時にまじめに求道者のように学ぶ意欲の続く先生の文章の合間に、怠惰な自分の姿がイメージされて恥ずかしく思うこともたびたびあった。

鈴木先生は、あとがきの中で本書を書き著す動機として「日本のみならず、世界中において差別・偏見・排除が強くなってきている。そのような中でキリスト教が示すものは何か、それが本書を著す契機になっている。」とされ、また、続けて「私は、『非寛容と排除』が、現代社会の特徴としてあげられる中で、もう一度聖書に立ち返り、イエス・キリストが私たちに何を求めておられるのかを聞きたいと思う」と書かれている。鈴木先生がどのような思いで本著を書かれたかを推し量ることは、本著作を読まれる多くの方々に大きな示唆を与えることになると予感している。それは、一人の

キリスト者の苦悩の道と教師として障害者へ愛情深く教え導いた記録を書き上げたものにとどまらず、これからのインクルーシブ社会、インクルーシブ教育の到来を予見していると見ることができるからである。

本書は、第一部のインクルージョン神学への道と第二部のインクルーシブ神学の二部構成をとっている。どこから読み初めても鈴木先生の思いが読者に感銘をもって伝わらと思うが、是非、序章から読み進められることをお勧めしたい。それは、序章の中で鈴木先生がどのようなことに悩み、どのような出会いがあって今日の考えに至ったとかが、分かり易い文章表現で書かれているからである。一般に読者は、著作者の考え方や生き方などを著作の中から読みとるだけでなく、自分の思考・行動と対比させ、興味・共感・同意・反論・称賛・疑いなどの高度な精神的な活動を、文脈に沿って行うものである。筆者は、鈴木先生とは、同じ世代に属する者であることから歴史上の出来事(1960年から70年代を)を共有している。そのことによって、先生の思い悩まれたことや、さまざまな考えを発展されてきた時代が知識としてだけでなく経験事実として理解できるのである。一つの例として、当時の若者は、社会の混乱の中に身を置き大きな影響を受けている。当時の大学生は学園紛争の洗礼を受け全共闘世代という時代に育っているため、闘争を目前にして、「自分の考えを明確にしなくては」という現実の思いがあった。社会の悪に行動をもって対抗すると同時に、学生は社会のあり方や自分の生き方等を真剣に考えることが求められていたのである。

鈴木先生が、哲学・宗教を学ぶ中からキリスト教へと進まれたことは、本著の中で「私は学生デモに身を投ずることもなく、いわばノンポリとして全共闘には背を向けて、ひたすら自己に沈潜する生活を送った。弁護士になろうとする初志はいつしか消え果て、哲学と宗教が最大の関心事となっていた。」と回想されている。これによって、先生のキリスト者としての変容がその時代と大きな関係があることが読み取れて大変に興味深い。その後、ベルジャーエフやキルケゴールの著作と出合い、実存主義哲学を学ばれることになり、「それらの哲学を通じてキリスト教会に通うようになり、信仰者として生きるようになり、さらに教会の伝道師になって現在に至っている。」と述べられている。本書の第一部では、先生がどのような経緯でキリスト教への出会いを経て、現在の伝道師として活躍されるまでの経験があるのかを赤裸々に書き表されている。人の生き方や人生の意味について真剣に悩んでいる若い方にも、様々な示唆を与えてくれることが期待できるので、是非一読されて欲しい。一人の人間の生き様は、まさにドラマである。いやドラマ以上に迫力があるものである。

鈴木先生が教師とされる前の話である。先生は弁護士を目指して法律を学んだが、就職は石油会社で営業の仕事をして3年間続けられた。しかし結局、貧しさに苦しむ人々の教会の牧師になるためには、職業的な自立が必要ということで教師を目指された。そして神学校で学ばれ、教会での貧しい人々への支援の姿については、先生の信念に率直な生き方そのものであろう。また、それはこの本の全体を貫いて大きな柱となっている。教師を目指す原点として先生は、出身の長野県の小学校の事を書かれた中で、「私が障害のある子どもたちの教師になろうと考えたのは、先

生と大切にしたいその子との出会いがあるからだと思っている。私はどこに行っても、この先生について語る。障害のある子どもを大事にして、退職後もずっとその子を心配しているその姿に、教師とは何かを考えさせられるからである。」と語っている。その後、中学校社会科の教師、中学校特殊学級の教師を経て、神奈川県第二教育センターの指導主事として教育行政の仕事を担当することになる。

神奈川県では1984年に今後の取り組むべき教育の根底に「統合教育」を掲げ、障害のある子どもたちと障害のない子どもたちが共に学び合う教育環境を設定するという提言を行っている。鈴木先生は、ここで初めて「インクルージョン」の理念と出会った。その時のことを先生は、「インクルージョンの理念について学ぶ中で、今までの教育者としての経験から、今後進むべき方向性をそこにみるようになっていった。それは私の生育歴や環境と大きな繋がりがあると考えられた。幼少の頃からの障害児や外国人、教会でのホームレスや貧困者たちとの出会いから、インクルーシブ社会の実現が、私の目標として浮かび上がってきた。」と書かれている。本著では、その後の神奈川県のモデル校作りに専念されて、インクルーシブ社会を目指して地域社会との困難な連携・理解などで行われた詳細な活躍ぶりが披露されている。

教育界では、教育観の大きな変換点としてサラマンカ宣言を持ち出すことが多い。この宣言は、「インクルージョンとは、人は障害者と健常者に二分できるのか?という人間観から始まっている。インクルージョンの教育では、民族、言語、性別、障害などの理由で人を排除するのではなく、子どもの個別ニーズに合わせた愛情豊かな教育を目指し、一人ひとりの違いを祝福し歓迎する価値観に基づいている。」としている。また、これはインクルージョン教育宣言であり、国連、ユネスコが支援推進を行っていることは、広く知られている。正にこれからの教育の方向を示しているものである。この方向で実践されてこられた鈴木先生の実践は、今後、様々な形で多くの教育者や学校等で継承発展されるべきものである。特にこれからの時代の教育を担う若手の先生方の教育観の育成に大きな影響を与えるものであるといえる。

第一部の3章「インクルーシブ神学」では、これまでのキリスト教の功罪を分かりやすく、事実を積み上げる手法で、示している。先生が言うキリスト教は、聖書の原点にもどり、貧しく苦しむ人々の教会に戻ることである。鈴木先生は、ご自身の論文「キリスト教におけるインクルージョン研究」—ルカ神学における障害理解—(本学園紀要第10号)の中で、聖書の中に登場する多くの障害者や病人については、その意味や理解をどのように考えるかをまとめておられる。本書を読まれた方は、是非、より深くまなばれるためにも上記論文に目を通されることをお願いしたい。

最後に、鈴木先生のインクルージョン思想に基づく、キリスト教会の改革とインクルーシブ教育への実践は、今後も地域社会と学校教育の中で大きな波となっていくものであると確信する。また、多くの賛同者の輪が広がり、障害者を含め差別されない真の共存社会・教育の実現に尽力されることを願うものである。

(新教出版社 2016年, 217頁)